

北海道国際理解教育研究協議会 会報

第 8 号
代 表 千葉 福男
事務局 磯貝 登
務 局 中村 保
局 中村 保
広 報 部 桜田 和雄
発 行 行 63.12.10

『たくましく世界に生きる

1988

子どもの育成をめざして』

—地域や学校の特色を生かした国際理解教育—

第9回北海道国際理解教育研究大会が去る11月4日、5日の両日、七飯町・八雲町・森町の3町において開催されました。

日本は、今、これまでの追いつき型近代化から脱皮して、人と人との交流、心の触れ合いをベースに均衡のとれた国際交流と国際化への対応を構築を迫られています。その根本は、「異なっていて当然、異なっているからこそ存在価値があり尊重されるべきである。」という異なるものに対する理解観、認識観の形成であります。

本大会は、この根本理念を教育において「個性の尊重、ひとりひとりの人間の尊重、即ち基本的人権の尊重が人間理解の基本である。」との構図と同一にとらえ、国際理解教育のありかたを究明いたしました。

基調報告（全道）

協議会事務局次長 中村 保

1. 国際化への対応
2. 国際理解教育に求められるもの
3. 大会主題設定にあたって
4. 研究の流れと課題
 - 1) 研究の経過
 - 2) 今年度の研究内容の取り組み
 - 3) 今後の課題と方向

分科会の内容

第一分科会

テーマ 『世界との交流』

第一分科会では、八雲小学校の長田修一教諭の公開授業を土台にして、国際理解に関する教育をいかに授業の中に取り入れていったらよいかということについて話し合われた。

4年生の社会科の単元である「あたたかい土地と寒い土地」の発展として子どもたちの身近にある食べ物であるバナナからフィリピンの労働者の姿に迫っていった授業であったが中学年でどこまで内容を深めていくことができるか、諸先生方の様々な体験談を交えながら論議された。

<川崎昭三先生（函館市立東山小学校長…助言者）>

- ・函館にある北海道国際交流センターの紹介……民泊を通しての国際交流・留学生の学校訪問
- ・国際交流が盛んになる一方で「日本の国が突然なくなったとしても誰も悲しまない」といわれるほど日本人が外国から嫌われているという現実を指摘され、「軽薄な国際理解は、むしろ偏見を生む恐れがある、真の国際交流のねらいは人間性を、大切に作る教育に裏付けられたものでなければならない。」と提言された。

<山田富雄先生（江差町立南が丘小学校長…助言者）>

これまでの日本は経済を軸にして発展し、他の国と交わってきたが、これからは文明・文化を軸にして他の国と交わることが必要とされている。そのためにも、どうやって、人と心の交流を図るのかという教育が進められなければならない。

<笹原志朗先生（渡島教育局指導主事…助言者）>

- ・社会科のねらいの中で、国際理解の視野でどれだけ授業の中に入れていけるかというのが今回のポイントだった。そのためにも、わが国の自然条件の理解がきちんとなされた上で、それにかかわってくる他の国のことを知るといふ授業の進め方はどうだろうか。
- ・国際理解教育とは、日常の全人教育であり、優れた人間教育の場でもある。21世紀に生きる子どもに必要なこととして、日本人としての基本的な生活習慣・行動様式をもう一度見詰め直す必要があるのではないだろうか。

- ・国際理解教育とは、無国籍人間をつくるものではない。郷土文化に対する理解の必要性。
- ・国の文化は人間の個性と同じである。人間一人におきかえると個性の尊重がいわれているように、国それぞれを尊重し、理解していくということは、結局は人間理解に帰するものである。

第二分科会

テーマ 『世界平和』

- ・次代を担う生徒に、世界平和のために貢献する態度を育てるにはどうするか。
- ・国際理解教育の位置づけと授業のありかた。
- ・態度化・実践化をはかる国際理解教育はどうあるべきか。

第二分科会では、国語科（2年生）平和への願い「ベンチ」の公開授業（ハンス・ペーター作『あの頃はフリードリヒがいた』より、1940年のベンチの部分の題材……第2次世界大戦中のナチス・ヒットラーによるユダヤ人虐待の中に生きた人々の心情に迫りながら、戦争の惨劇をみつめ、世界平和への願いを喚起する）を受け、

- 1) 戦争や人種差別・偏見を越えた異民族理解、国際理解、国際平和への教育はどうあるべきか。
- 2) 教科のねらいと国際理解教育の目指すものとの兼ね合いはどうするのか。

また、他教科との関連、学校教育への位置づけをどう押えていくか。

の2点について熱心な意見の交換がなされました。

『授業についての意見交換－国際平和を見据えた授業』

<飯田幸三先生（森町立森中学校…授業者）>

授業では、第2次世界大戦中の惨劇・人種差別を受けた人々の心情に迫り、生徒一人ひとりが平和の大切さに気づき、各々の感想を持てるよう配慮した。国語科では、様々な場面で国際理解に関わる事項があるが、国語科に限らずどんな教科でも、意図的に国際理解関連事項を取り出さなければならないと思われる。

<中山福雄先生（もみじ台南中）>

人種差別を取り上げた教材選定は大変良かったと思う。国際理解についてのプリント資料やVTRの準備が非常に良かったのではないか。「人間が最も恐しい」と感想を持った子どもたちの批判力を引き出せた授業だったと考える。

登場人物の心情に迫り、その後でVTRでその時代の社会の背景をみる事によって、人種差別・戦争の悲惨・平和の必要性を感じるところまで生徒が深く理解できたことは良かったのではないか。

『国際理解教育の位置づけ』

<浅野富士男先生（上川中川町佐久中）>

国語でアウシュビッツなどの歴史に関わることが取りあげられたが、他教科との関連（例えば社会科）をどうとらえれば良いか考えたい。

<高橋一也先生（函館五稜郭中）>

国語・社会、あるいは道徳などそれぞれのねらいがあるが、それと国際理解のめざすものとの兼ね合いはどうか。

一教科だけで取り組んでも形にならないのではないか。学校体制としてどう取り組んでいくか考えなくてはならないのではないか。

<坂下晃一先生（旭川中）>

昨年度大会もその点について議論されたが、国際理解という領域はない。学校体制でなければ取り組めないということはないと考える。各教科・領域のあらゆる場面を通してアプローチすることができるものと考えて良いと思う。

<中里勝平先生（函館市教育委員会指導主事…助言者）>

領域・教科を問わず、学校教育のあらゆる場面を通じて国際理解の感覚を研ぎすましていくことが求められる。そして意識的に各教科を国際理解のフィルターを通して眺めることが必要ではないか。道徳も特別活動も免許はないものだし、国際理解も免許はないが、現在ほどそれが求められている時はない。

<高橋長一先生（函館五稜郭中学校長…助言者）>

系統的に研究を進めていくためには、今後、教育課程の中でどう位置づけていくか考える必要があるだろう。その教科の先生だけではなく、他教科とも共通理解をはかっていくことも大切であろう。

<秋山修世先生（函館西中学校長…助言者）>

国際的に通用する人間の育成は各教科の目標に据えられている。どう具体的に実践していくか、題材の見方も教師自身が深めていくこと、またそのためには、教師側の視野も広く外に向いていることが求められる。そして深く「根っこ」に国際理解の意識をもっていることが欠かせない要因である。

<飯田幸三先生（森町立森中）>

態度化・実践化の点では、必ずしも形の見える答えは必要ないのではないか。問題を投げかけ、こどもが能動的に意識化することが先。今日、明日国際理解の花が咲くものではなく、態度化・実践化は後の課題に据えられるものと思う。

<坂下晃一先生（旭川中）>

一口で言えば、郷土の理解が国際理解に発展していくものと考えて。生徒に国際理解を求める以前に教師自身が国際化していくことが必要。今、国際理解の種を蒔けば、一定の機会があれば、態度化・実践化できるのは将来大いに期待できるものと考えて良いのではないか。

[討議のまとめ]

<中里勝平先生（函館市教育委員会指導主事）>

授業については、良く国際理解のフィルターからねらいが据えられ、教科のねらいからも外れていず素晴らしかった。

今回の公開授業と討議のまとめとして以下の五点をもってまとめとしたい。

- ①授業で「自分がヘルガだったらどうするか」についての14名の共感と20名の無関心に対する教育的な配慮も国際理解教育の中に求められよう。
- ②VTRでドイツ・ポーランドの現在の人々についての誤解のない理解を助ける必要もあろう。
- ③今後、国際理解は三領域への位置づけも加味した学校経営の中で行われる事が一層望ましい。。
- ④小・中・高が一貫した連携を持った国際理解教育、地域との連携、相互理解が求められよう。
- ⑤民族間理解～お互いの人種・民族が尊敬の念を持って国際交流を深めていけるよう、今後具体的な実践も含めて研鑽を深めていきたいと思います。

第三分科会

テーマ『国際協力』

- ・国際理解教育の意義
- ・教育課程の位置づけ
- ・指導計画内容のあり方
- ・態度化実践化の工夫

第三分科会では、国際理解教育を語る前に、八雲養護学校高等部の研究授業で参加者全員が「大変深い感銘を受けた。」という感想から始まった。精神的にも身体的にも大きなハンディキャップをもった生徒が自分の力を最大限に出しきって作業している様子、ネパールとの交流の手順をベットに横たわったままの司会生徒を中心に真剣に討論している様子、生徒たちからほとぼしり出る思いやりの心、精一杯生きようと努力する様子に感動し、胸を打たれたことなどが話された。

次に授業担当者原恒夫先生から国際理解教育の授業への組み入れ方についての実践報告があり、入院生活というごく限られた教職員の中での交流しか知らない生徒に外国についてまでの理解は難しいが、無線活動を通して20カ国との交信窓口を持っていること、ユネスコ活動を進めていること、ネパールとの交流をはかっていることなどの報告があり、その後 国際理解教育に対する考えが提言された。

<石郷岡武先生（千軒中学校）>

「わざわざ国際理解教育をやらなければならない日本が悲しいですね。」と言われた八雲養護学校校長先生の話を紹介した上で「外国に限らず自分と異なる人を理解することが国際理解につながるのではないか。」と提言された。

<藤田俊太郎先生（上磯町立茂辺地小学校）…助言者>

「国際理解のための国際理解でなく人間の本質をみきわめる事が大切なのではないか。」と提言された。

<清水寛先生（八雲町立大関小学校）…助言者>

「個性を尊重し、一人ひとりの個性を充分活動させることが国際理解につながるのではないか。」と提言された。

< 藤原忠先生（渡島教育局指導主事…助言者） >

「ノーマライゼーションは国際理解の根幹になるのではないか。今の時代は物から人への交流に変わってきている。この人間間の交流こそが大切なのではないか。

国際交流には二面性があり、一つは相手の心を思いやり、相手をわかるための交流、そしてその裏には戦いのための国際理解が必要である。きれいごとだけでなく、世界の中で日本が生きていくための手段として、昔の戦いは戦争であったが今は友好関係を通して戦っていくのだ、ということも先生方の心にとどめていただきたい。」という提言がなされた。

記念講演『世界の中の日本人』

函館遺愛女子高等学校長 赤城泰氏

エール大学の留学生として2年、神学生として1年、そして牧師として7年、計10年間のアメリカ生活を通して、ご自身の国際交流体験からの講演であった。それは、氏にとって、さまざまな国籍を持つ人々との直接的な交流を通して、いかに異文化を相互に影響し合う中で理解し合うかという体験の歴史であったようである。

文化は、アイデンティティ（自己同一性）にかかわるものだから「自文化の重要性は、他文化の人にとっても重要性をもつもの」という相互理解から、文化の創造へと発展する中に本当の国際交流と国際理解があると説かれた。つまり相互の接触の中から、自分の文化の確立、個の確立、他の確立された個と自分の確立された個との相互交流に、いかに発展させていくかということなのである。

そして、「私の中の日本人」とは、「私の中の世界」を究極的に考える中から確立されるという。51億人という個の人々の総数の中で、私自身の国際性は、私自身の人間観は……、そしてその確立はどうあれば良いかと、私の中の世界を追及すべきという。

特に教師としては、教師自身の自己理解—自己確立—人間観の確立をどうするかが問題であるという。51億のみんなが生きていける知恵を、大きな人間理解の中で求めていくところに国際理解の根本があると結ばれた。

全体協議

提言1 『国際理解教育の在り方』

札幌市立藻岩小学校

教諭 後藤 宏

国際化に対応できる子どもを育てるため、これからの教師に求められるものを西ドイツ・フランクフルト日本人学校での実践を含め、教科・道徳・特別活動の三領域の中で取り組むことと各家庭との共通理解と協力をはかることが国際理解教育が根付く基礎であるとの考えが述べられた。

提言2 「滝川市における国際交流」

滝川市立江部乙中学校

教頭 石塚 喜法

滝川市国際交流推進委員

滝川市は国際交流を市政執行方針に掲げ学校教育においても重点としている。滝川市立西高等学校に英語指導助手として、スコットランドから先生を迎えている。滝川市在住の50世帯92人の外国人との交流会実施、スウェーデン・キルナ市長一行を迎えての“まちづくり国際シンポジウム”等々幅広く取り組まれている実践について発表された。

助言者から

・岩見沢中央小学校長 磯貝 登

1. 管理職の意識を変えなければならない。
2. 教職員の関心を高めるための育成が必要である。
3. 集会活動を積極的に取り入れ、雰囲気作りをする。
 - ・ハレルヤを全校生徒で3年間歌っている。
 - ・世界各国のけん玉を素材に、話し合う。

国際理解教育に取り組むにあたり、同質的文化の理解を異質文化化への理解のステップとすることができる。人と人との交流、広域的な生活圏の中での交流、教師と児童との交流を広め深めながら国際理解教育の教育の分野の充実をはかっていくことが望まれる。

・前峠下中学校長 福士光男

日本人は話すこと（説明）が苦手である。語い不足からくる論理的な思考力に欠けることから相手にどのように話していくか、言語事実に応じてどのようにしたら伝えられるかを考えていかなければならない。

まわりの人への人間関係ができないで何故国際理解ができるか、いじめ・登校拒否・日常問題解決がなされないで国際理解はできない。足もとをしっかりと見て握手をする人間関係を作っていくことが大切である。

地域と世界とのつながりを見た時、工夫されている自分のくらしにも目を向けさせていく教材の開発も必要である。

国際理解教育は特殊なものではない。身近なところから始まるものである。

事務局からのお願い

1. 会費の納入を至急

会費の納入状況が悪く、会計では大変困っています。現在のところ、全道大会に支出した20万円の一部も赤字財政でまかなっている状況です。

何度も事務局から納入のお願いをしていますが、退会の連絡もなければ一度の納入もないという方が年々増え続けているため、予算のたてかたはもとより、事業等会の運営にも支障をきたしています。

冬のボーナスも入ったことです。今回同封しました納入状況を参考にして、納入できる年度からで結構ですから、なんとか1年分でも2年分でも納入して下さい。

2. 国際理解に関する資料を道研へ

お手元の資料のうち余分なもので結構です。是非送って下さい。せっかく会として無理にお願いしておきながら、さっぱり資料が送付されていない現状です。この冬休みに整理をされて1冊でも2冊でも送ってください。

069 江別市文京台東町42

北海道立教育研究所資料室 御中

TEL 011-386-4511

第16回 全国大会のお知らせ

期日 64年8月4、5日

場所 仙台市

七夕祭りの開催中ですので、宿舎を各自でお早めに手配してください。